HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サークルネットワークとしての『サークル村』
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 129, 85(右)-129(右)
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39995
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS129-003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サークルネットワークとしての『サークル村』

水溜真由美

はじめに

近年、一九五八年九月から六一年一〇月にかけて九州で発行された月刊のミニコミ誌『サークル村』が注目を集めている。[1] その背景として、同時代の文化運動・サークル運動全般について関心が高まりつつあることを指摘することができる。

『サークル村』は、谷川雁、上野英信、森崎和江、石牟礼道子ら、九州を拠点として活動した著名な知識人が参加したことで知られる。しかし、『サークル村』はインテリ作家による同人誌としてではなく、サークル誌として創刊された。しかも、『サークル村』は、全国各地で発行されていた無数のサークル誌の一つには留まらなかった。『サークル村』は、様々なバックグラウンドを持つサークル運動家を結合し、九州・山口に「巨大サークル」を生み出すことを

企図して創刊された。こうした『サークル村』の試みは、『サークル村』創刊に先立って各地に存在した多様なサークルをネットワーク化することによって実現した。

といっても、『サークル村』は、サークルのネットワーク化を試みた初めての運動だったわけではない。サークル運動がピークに達する一九五〇年代半ばには、様々な回路を通じてサークル間の交流が行われた。地域ごと、産業部門ごと、ジャンルごとに大規模なサークル協議会が組織されるケースも少なくなかった。『サークル村』の運動のオルガナイザーであった谷川雁は、こうしたサークル間のネットワーク化の動きにヒントを得て、またその一層の発展を企図して、『サークル村』の運動を開始したと考えられる。

その背景には、労働組合運動の次元では打破しがたい労働者のセクト的な分断状況を、文化運動のレベルで大胆に乗り越えるようとする、谷川のユニークな構想が横たわっていた[2]。当時の労働組合運動の文脈では、産業別の労働者間の連帯を阻む企業別組合の欠陥が頻繁に問題にされていた。谷川は、こうした企業別組合の欠陥をふまえ、サークルというインフォーマルな回路を通じて労働者間の横断的な連帯関係を築きあげようとした。

同時に、谷川は、地域、職業、ジェンダーなどの多様な断層を考慮しながら、異質な者同士が対立しつつ交流する場を作り出すことを、『サークル村』の運動の大きな賭け金とした。こうした谷川のヴィジョンは、「労働者と農民の、知識人と民衆の、古い世代と新しい世代の、中央と地方の、男と女の、一つの分野と他の分野の間に横たわるはげしい断層、亀裂は波瀾と飛躍をふくむ衝突、対立による統一、そのための大規模な交流によってのみ越えられるであろう」[3]という創刊宣言のよく知られた一節に、はっきりと示されている。

右のような谷川のユニークな構想を念頭に置きながら、本稿では、『サークル村』の運動が、どのような地域・産業

部門・ジャンルのサークル運動を基盤として、またどのようなサークル運動家のネットワークを利用することによって可能になったのかを考察したい。また、『サークル村』誌上で何が論じられたのかということよりも、誰が、どのようなバックグラウンドの下で、どのような回路を通じて運動に参加したのかということに力点をおいて『サークル村』の運動を検討したい。翻ってこのことは、『サークル村』の運動を「同一平面における交流の舞台」として、つまりサークル運動家たちのネットワークの結節点として捉え直すことにつながるだろう。

第一節では、『サークル村』の編集委員の顔ぶれや、メンバーの所属サークルの分布を明らかにし、どのような地域・産業部門・ジャンルのサークルをネットワーク化することによって、九州七県および山口県を包摂する広範な地域に「巨大サークル」が組織され得たのかを考察する。また、サークル間の交流を促すために、『サークル村』が試みたユニークな交流実践についても検討する。

第二節では、『サークル村』の事務局が置かれた中間周辺に焦点を定める。『サークル村』の運動には、九州・山口全域から多数の運動家が参加したが、地元のサークル運動家が果たした役割はことのほか大きかった。第二節では、上野英信を中心として、筑豊の炭鉱のサークル運動家と中間周辺の地域のサークル運動家の間にユニークなネットワークが形成されるに至った経緯について検討する。

一　九州・山口のサークルネットワーク

『サークル村』は、九州七県と山口県にわたる地域のサークル交流誌として創刊された。創刊号の巻末の「入会案内」

には、「既に全九州・山口のあらゆる地域、職場から、二百名をこえる人々が参加しています」という記述が見られる。[4] 交通手段・通信手段が今日ほど発達していなかった一九五〇年代に、これほど広い範囲から多くの会員を募るのはさぞかし困難であっただろう。『サークル村』を主導した谷川雁や上野英信らは、これらの会員をどのようにしてリクルートしたのだろうか。

『サークル村』創刊の経緯に触れた「『サークル村』始末期」[5]や「報告風の不満――九州の情勢をめぐって」[6]によると、谷川は『サークル村』の構想を実現するため、九州南部から北部に移住し、労働組合やサークルの会合を「しらみつぶしに」回って参加者を募ったようだ。また谷川は、「地域・企業ごとに目標を設定」し、「趣意書をばらまき、会員を募った」とも証言している。[7]

後述するように、『サークル村』の会員の圧倒的多数は、『サークル村』に先立って組織されていた地域サークルや職場サークルの会員であった。つまり、谷川や上野は、地域や職業の多様性を考慮しつつ、既存のサークルに広く働きかけることによって、『サークル村』の会員をリクルートしていったと考えることができる。それでは、『サークル村』にはどのような地域・産業部門・ジャンルのサークル運動家が集ったのだろうか。

(1)編集委員・運営委員の顔ぶれ

まずは、『サークル村』の編集委員・運営委員の顔ぶれとその移り変わりを見てみたい。表一は、編集委員・運営委員の氏名、地域、所属（勤務先およびサークル）を、筆者の知り得た範囲でまとめたものである。[8]

『サークル村』は一九六〇年五月刊行の第三巻第五号をもって休刊し、同年九月に再刊された。再刊後の『サークル

表１　『サークル村』編集委員・運営委員

氏名	地域[*1]	所属(勤務先・サークル)	第１期(編集委員)				第2期(運営委員)[*2]
			1958.9-10	1958.11-59.7	1959.8-10	1959.11-60.5	1960.9-61.10
谷川雁	中間市		■	■	■	■	■
上野英信	中間市	(日炭高松)	■	■	■	■	■
森崎和江	中間市		■	■	■	■	
木村日出夫	山田市	三菱上山田炭鉱、山田文学サークル(『山田文学』)	■	■			
神谷国善	福岡市	九州青年合唱団・全九州合唱団会議	■	■			
田中巌	福岡市	福岡貯金局、全逓福岡貯金文学サークル	■	■	■	■	■
田村和雅(佐々省三郎)	八幡市	八幡製鉄、八幡製鉄文学会	■	■	■	■	
花田克己	宇部市	宇部興産東見初炭鉱、東見初文学サークル(『まきやぐら』)	■	■	■	■	
森一作	八幡市折尾	日本機関誌協会	■	■			
沖田活美	中間市	大正鉱業、大正中鶴文学サークル(『裸像』)		■	■	■	■
荻野雅弘	不明	福岡映画協会		■	■	■	
千喜田春夫	鳥栖市	国鉄、門鉄詩話会		■	■	■	■
簑原千年	嘉穂郡	(教員)、穂波読書会			■	■	
上田博	水巻町	日炭高松、日炭高松文学・美術サークル			■	■	
阪田勝	八幡市(香月町)・中間市	九州採炭、九州採炭文学サークル(『あしおと』)、香月町青年団体協議会・演劇研究会			■	■	■
福森隆	福岡市	福岡貯金局、全逓福岡貯金文学サークル			■	■	■
中村卓美	八幡市	八幡製鉄（下請け）				■	■
香月寿	八幡市(香月町)	香月町青年団体協議会・演劇研究会					■
古川実	中間市	中間市青年団					■
小日向哲也	中間市	大正鉱業、大正中鶴文学サークル(『裸像』)					■
村田久	八幡市(香月町)	三菱化成、香月町青年団体協議会・だるま会					■
加藤重一	飯塚市→中間市	映画サークル協議会(飯塚)					■

[*1] 原則として文化活動の拠点地域を記載した。文化活動の拠点地域が不確かな場合は、居住地または職場の所在地を記載した。
中間における市制施行は 1958 年 11 月であるが、本表では「中間市」とした。
[*2] 1961.2 以降は不明である。千喜田春夫は 1960.12 まで。

村』は活版からガリ版刷りになるなど簡素化され、誌面の傾向も変化した。しばしば、休刊前の『サークル村』を「第一期」、休刊後を「第二期」と呼ぶことがあるが、本稿もこの慣習に従う。

「第一期」においては「編集委員」の一覧が、「第二期」においては「編集委員」を含む「運営委員」の一覧が巻末に示されている。本稿の目的は『サークル村』の中心的なメンバーの顔ぶれを知ることにあるので、「第二期」については、「編集委員」のみならず「運営委員」全員の氏名を拾い出してある。(9)

○創刊時の編集委員

まず、創刊時の編集委員の顔ぶれを見てみたい。創刊時の編集委員は、谷川雁、上野英信、森崎和江、木村日出夫、神谷国善、田中巌、田村和雅、花田克己、森一作の九名である。

周知のように、谷川雁は、『サークル村』のオルガナイザーであった。谷川は結核療養のため一九五〇年代前半を故郷水俣や阿蘇など熊本県で過ごし、『サークル村』創刊のため福岡県に移住した。谷川が、『サークル村』の構想を念頭におきつつ九州北部の労働組合やサークルの会合を「しらみつぶし」に回ったことは先に触れたとおりだが、九州南部のサークル運動家のリクルートについては、谷川の人脈に依拠する部分がとくに大きかったと思われる。(10)

もう一人のオルガナイザー上野英信は、一九五三年まで中間市に隣接する水巻の日炭高松に鉱員として勤務し、この間文学サークル運動の中心的な運動家として活動した。上野は一九五三年に真鍋呉夫事件によって日炭を解雇された後も日炭の文学運動に関わり、炭労（日本炭鉱労働組合）が発行する『炭労新聞』、『月刊炭労』にも絵ばなしやルポを発表した。また、上野は、炭鉱労働者を中心とする地域のサークル運動を様々な形で支援した。この点については、第二節で詳述する。

森崎和江は、一九五八年に谷川雁と共に中間に移り住んだ。編集委員中の紅一点であった森崎は、やがて女性たちの間に独自のネットワークを作り上げて女性交流誌『無名通信』の運動を開始することになる。

木村日出夫と花田克己は炭鉱のサークル運動家だった。木村は三菱上山田炭鉱の文学サークル『山田文学』の、花田は宇部興産東見初炭鉱の文学サークル『まきやぐら』の中心的な運動家であり、両者は炭労の文化誌『月刊炭労』の常連でもあった。上野は、木村や花田と旧知の間柄であり、木村、花田の編集委員へのリクルートは、上野との人的つながりによるものと推測できる。

神谷国善は、九州のうえたごえ運動のリーダーだった。一九五〇年代半ばより、神谷は、九州青年合唱団の専従スタッフとして、全九州合唱団会議の事務局を担った[11]。全九州合唱団会議は、九州各地のうたごえサークルの連合組織であり、「九州のうたごえ」の開催など、九州におけるうたごえ運動の振興やうたごえ運動家の交流に大きな役割を果たした。当時の熱心なサークル運動家の多くはうたごえ運動に関与していたため、『サークル村』の主要な会員にとって神谷はよく知られた存在であったと推測できる。

田中巌は、福岡貯金局の文学サークルにおける中心的な運動家だった。田中によると、一九五七年一一月の第一回全逓九州詩人大会での谷川雁との出会いが、福岡貯金局の文学サークルの大きな転機となったようである[12]。福岡貯金局からは、田中のほか後に編集委員となる福森隆や大長静代ら多数の運動家が『サークル村』に参加した。また、田中は全逓九州詩話会を基盤として、一九五七年後半より全逓詩人連盟の結成を主導するなど[13]、全逓（全逓信労働組合）を代表する文学サークル運動家でもあった。

田村和雅は八幡製鉄の文学サークルの中心的な運動家であった。八幡製鉄からも複数の会員が『サークル村』に参

加している。田村は、「往復書簡」や「内政干渉」の欄に、「佐々省三郎」のペンネームを用いて何度も論争的な文章を執筆している。一九五八年一一月に八幡製鉄企業祭の見学とその翌日に第一回総会が催された折には、田村は、世話役を一手に引き受けたという[14]。

森一作は、日本機関紙協会に所属し、水巻に近い折尾事務所に勤務していた。森は、労働組合の機関誌の編集指導を担った関係などから、上野を始めとする日炭の労働組合員と懇意であったようだ[15]。

これまで述べてきたように、創刊時の編集委員のほとんどは九州および山口におけるサークル運動の中心的な担い手であった。以上のような編集委員の顔ぶれから、『サークル村』が九州および山口におけるサークルをネットワーク化することによって実現したことをうかがうことができる。谷川や上野は、各々の人的なつながりを利用しつつ、また地域や職業・産業部門の多様性を考慮しながら、主立ったサークル運動家を編集委員にリクルートしていったと考えられる。

森崎和江によると、創刊時の編集委員九名のうち森崎をのぞく八名が共産党員だった[16]。当時熱心なサークル運動家の多くは共産党員だったが、『サークル村』の組織化にあたって、谷川や上野が共産党のネットワークを利用したであろうことは想像に難くない[17]。

なお、すべての編集部員を『サークル村』の運動の実質的なコアメンバーとみなし得るかどうかは疑問である。特に、神谷国善や森一作は『サークル村』の活動にほとんど関与しなかったようだ[18]。しかも、二人は一九五九年八月以降編集員からはずれている。詳しいことはわからないが、創刊時の編集委員の人選には、サークルの広範な連帯をアピールするための、あるいは共産党の協力をとりつけるための、戦略的な意図が働いていたかもしれない。

○一九五八年秋における新しい編集委員の参入

創刊後間もない第一巻第三号（一九五八年一一月）より、新たに沖田活美、荻野雅弘、千喜田春夫が編集委員に加わっている。

沖田活美は大正鉱業の鉱員で大正中鶴文学サークルの中心的な運動家であり、『月刊炭労』誌上にも短歌を頻繁に発表した。大正鉱業は中間市の石炭会社で、後の大正闘争の舞台となった。大正鉱業からは、沖田のほかに小日向哲也、杉原茂雄らが『サークル村』の運動に参加した。

荻野雅弘は映画評やサークル論を『サークル村』に寄稿しているが、現在のところ、福岡映画協会の会員という以上のことは判明していない。

千喜田春夫（本名納塚春夫）は国鉄職員（鳥栖機関区）で門鉄詩話会の会員であった。門鉄詩話会は、国鉄詩連盟の中でも、「数多くの書き手を持ち、特色のある優れた詩人を擁」する有数の詩サークルで、『サークル村』が創刊された時点で約一〇年の歴史があった[19]。なお、門鉄詩話会からは、松田軍造（吉塚機関区）も『サークル村』に参加している。

○一九五九年における編集委員の入れ替わり

一九五九年八月より、木村日出夫、神谷国善、森一作が編集委員を離れた[20]。

他方で、一九五九年八月より蓑原千年、上田博、阪田勝、福森隆が、また、一九五九年一一月より中村卓美が新たに編集委員に加わった。

蓑原千年は、嘉穂郡の教員で穂波読書会のメンバーだった[21]。

上田博は、日炭高松の中心的なサークル運動家だった。上田は、日炭のサークル運動家千田梅二の影響で版画を制作するようになり、職場のサークル運動に広く関わった。上野とは日炭時代からのつきあいがあった。

阪田勝は、九州採炭の労働組合書記だった。阪田は、香月町青年団体協議会の演劇サークルの中心的な運動家であったほか、九州採炭でも文学サークルを組織した。

福森隆は、田中巌と同じく福岡貯金局の文学サークルに所属していた。福森も、『サークル村』創刊時からの熱心な会員だった。

中村卓美は、八幡製鉄の下請け労働者だった。職場サークルは正規労働者によって組織されるのが通例であったため、『サークル村』において中村の存在は極めてユニークであった。

○「第二期」の運営委員の顔ぶれ

「第一期」から「第二期」にかけて『サークル村』の中核を担う編集委員・運営委員の顔ぶれは大きく変化した。その最大の要因として、一九六〇年半ばの休刊期間中に谷川雁らが共産党から離脱したことが指摘できる。九州サークル研究会と共産党との関係は、一九五九年七月の阿蘇集会以後急速に悪化していたが、安保闘争を契機として谷川らは共産党と決定的に袂を分かった。その必然的な帰結として、『サークル村』に止まった会員は党を離脱し、田村和雅、花田克己など共産党に止まった会員は『サークル村』を去った。

「第二期」の運営委員は、谷川雁、上野英信、田中巌、沖田活美、千喜田春夫（六〇年一二月まで）、阪田勝、福森隆、中村卓美、香月寿、古川実、小日向哲也、村田久、加藤重一の一三名である。このうち、新たに加わったメンバーは、香月寿、古川実、小日向哲也、村田久、加藤重一の五名だが、彼らは、いずれもかねてからの熱心な会員であっ

た。

香月寿は元共産党員で、香月町青年団体協議会の演劇サークルのリーダーだった。かつて自宅に上野英信を下宿させていたこともある香月は、上野と親しい間柄だった。香月は『サークル村』誌上にほとんど文章を寄稿していないが、事務局に足繁く出入りし『サークル村』の運動に深く関わった[22]。

古川実も元共産党員で、谷川や上野が所属する中間の地区細胞の細胞長を務めていた。古川は、中間の青年団活動に参加していたほか、大正鉱業の労働者と共に社会主義研究会を組織した[23]。香月寿と同様、古川も『サークル村』に寄稿したことはないが、『サークル村』の運動に深くコミットした。

小日向哲也は、大正鉱業の鉱員で大正中鶴文学サークルの中心的なメンバーだった。元共産党員だった小日向はかつて大正細胞に所属していたが、『サークル村』の会員だった沖田活美、杉原茂雄らと共に、一九六〇年七月に共産党より除名された。大正闘争では、小日向は、沖田、杉原と共に大正行動隊の中核的なメンバーとなった。

村田久は、三菱化成の社員で香月町青年団体協議会の学習サークル（だるま会）のリーダーだった。村田も、『サークル村』創刊時からの熱心な会員だった。

加藤重一は、元共産党員で山野炭鉱を解雇された後無職のまま飯塚に留まり映画サークル運動に従事した。加藤は、谷川らが共産党から除名処分を受けたことを知って急遽中間に移住し、「第二期」『サークル村』ではガリ切りを一手に引き受けた[24]。

以上見てきたとおり、「第一期」から「第二期」に移行する際にコアメンバー（編集委員・運営委員）の顔ぶれが大きく入れ替わっていることが指摘できる。全体の傾向としては、地域的な広がりが失われ、中間市周辺に居住する谷

川雁との結びつきの強いメンバーに限定されていったことがうかがえる。

(2)サークルの分布

冒頭で確認した通り、『サークル村』の運動の主眼は小集団に自閉しがちなサークル運動家の横断的な交流を促すことにおかれた。それでは、どのような地域・ジャンル・産業部門のサークル運動家が『サークル村』の運動に参加したのだろうか。以下では、会員の所属サークルの分布を検討したい。

第一巻第四号（一九五八年一二月）から第二巻四号（一九五九年四月）までの『サークル村』の巻末には、会員の所属サークルのリストと思われる「九州・山口サークル地図」が掲載されている[25]。これらのリストには、各サークルについて、サークル（誌）の名称・分野・責任者・住所が記載されている[26]。

リストアップされているサークル数は、二〇一[27]である。一九五八年一二月の時点において、『サークル村』の会員数が二五〇名であったことを考えると[28]、谷川らが、会員の多様性を確保することに大きな力点をおきながら、各地のサークル運動家をリクルートしたことがうかがえる[29]。

それでは、どの地域のどのようなサークルの運動家が『サークル村』の運動に参加していたのだろうか。まず、リストに記載されたサークル数を、地域別、ジャンル毎に分類した表二を見ていただきたい。地域による偏りは見られるものの、『サークル村』の運動に、九州七県および山口県の全域からサークル運動家が参加していたことを確認することができる。しかも、二〇一のサークルのうち七二は南九州（熊本県・宮崎県・鹿児島県）のサークルだった。サークル数から判断する限り、『サークル村』の運動の大きな課題とされていた南北九州の交流の前提が整えられていたこ

表 2　地域・ジャンル別サークル分布（「九州・山口サークル地図」より）

	文学	合唱・音楽	演劇	美術	映画	人形劇	学習	読書	生活記録	話し合い	生け花	その他	合計
山口県	3	1											4
福岡県	12*1	4	2		1		3						22
佐賀県	5	22	8		2		2	4				1	44
長崎県	15								3				18
大分県	4	7	2	5		2	11	6	2			2	41
熊本県	26	4					3			2			35
宮崎県	1												1
鹿児島県（うち加世田市）	3(2)	7(6)	1(1)		3(1)		1(1)	15(15)			3(3)	3(2)	36(31)
合計	69	45	13	5	6	2	20	25	5	2	3	6	201

*1「日炭高松文学・美術サークル」は「文学サークル」に分類した。

表 3　職業・産業部門別サークル分布（「九州・山口サークル地図」より）

	炭鉱	通信	交通	銀行	造船	自治体	教育	その他(職場)	大学・研究者	女性*1	療養所	青年団	労音	協議会*2	その他	不明	合計
山口県	3										1						4
福岡県	8	5						2				1		2		4	22
佐賀県	3		2	1		1		2	1	1	1	1		1		30	44
長崎県		2	3	1	2			1				1			1	7	18
大分県		2		2			1	1					1	5		29	41
熊本県			1			4	4	2	3	1			1	2	1	16	35
宮崎県																1	1
鹿児島県(うち加世田市)										17(17)*3		1(1)				18(13)	36(31)
合計	14	9	6	4	2	5	5	8*4	4	19	2	4	2	10	2*5	105	201

*1 女性を対象とするサークル(婦人会主催のサークル・母親学級を含む)。
*2「文化会議」を含む。
*3「向江生花グループ」は「青年団」と「婦人会」のサークルだが、「女性」に分類した。
*4「その他(職場)」の内訳は、製鉄・百貨店(福岡県)、専売・商工会議所(佐賀県)、自由労組(長崎県)、電線(大分県)、農業試験場・営林局(熊本県)である。
*5「その他」の内訳は、高校文芸班(長崎県)、新日本文学会熊本支部(熊本県)である。

とが確認できる。

サークルのジャンルについては、文学、合唱・音楽が圧倒的に多く、学習、読書、演劇がそれに続く。雑誌の発行を主体とする『サークル村』に文学サークルからの参加が多かったことは当然とも言えるが、ジャンルの分布については、概ね当時の職場サークル系のサークルの分布を反映していたと考えて良いだろう。

次に、職業・産業部門等の分布を見てみたい。多くの場合、少人数の対面集団としてのサークルは、職場や地域を基盤として組織された。そして、職場サークルの場合はもちろんだが、地域サークルであっても、メンバーの属性には偏りが生じがちであった。だからこそ、谷川は、サークル間の交流を促すことで、多様なメンバーが出会う場を作り出しサークルのたこつぼ化を打破しようとした。それでは、『サークル村』に参加したサークルには、どの程度多様性が含まれていたのだろうか。

「九州・山口サークル地図」にリストアップされたサークルを、職業・産業部門別に分類した表三を見ていただきたい。[30]「不明」が数多く存在する理由は、リストに記載された情報のみから、サークルの性格を把握することが容易でなかったためである。[31]

職場サークルの中では、炭鉱労働者のサークルが圧倒的に多い。そのほか通信（郵便局員など）、交通（国鉄職員など）、銀行、造船、自治体（県庁・市役所の職員）、教育（小中高の教師）の諸部門について、複数のサークルからの参加が確認できた。全体に、労働組合が強く、サークル運動が活発だった分野が多い。製鉄、百貨店、商工会議所、専売公社、農業試験場、営林局、電線などの職場サークルのメンバーも『サークル村』に参加した。職場サークル以外の特色あるサークルとしては、大学・研究者のサークル、女性のサークル、療養所のサークルなどが挙げられる。

このほか、地域の青年団からも会員の参加が見られた。以上のようなサークルの分布から、極めて多様な社会的属性を持つサークル運動家が『サークル村』に関わっていたことがうかがえる。

「九州・山口サークル地図」より、九州七県および山口県の全域におよぶ多様なサークルから運動家たちが『サークル村』の運動に参加していたことが確認できた。以下では、各々の会員の参加がどの程度実質を伴うものだったかを判断する一つの材料として、総会・懇談会への参加状況を見てみたい。

○第一回総会

『サークル村』創刊後間もない一九五八年一一月一七日から一八日にかけて、第一回総会が開催された。一七日には洞海湾に臨む皿倉山中腹の「少年の家」にて「サークル運動における交流の意味」をテーマとする討論会が行われ、翌一八日には八幡製鉄企業祭の見学が行われた。総会には、五〇名のメンバーが集まった。総会に参加したメンバーの所属サークルは、八幡製鉄文学サークル、八幡製鉄現業労組文学サークル、「鉄と花」文学サークル、北九州センターコーラス、木曜シャントール、安川電機文学サークル、三菱化成学習サークル、八幡だるま会、香月青年会、山田文学、福岡貯金局文学サークル、小富士村演劇サークル、門鉄詩話会(以上福岡県)、小城郡菱刈村読書会、戸上電機文学サークル（以上佐賀県)、国鉄佐世保文学サークル（長崎県)、水俣話合いサークル「ノラ」(熊本県)、鹿児島生活を記録する会、いずみの友（以上鹿児島県）の一九サークルである。(32)

○南九州サークル懇談会

一九五九年一月一〇日から一一日にかけて、熊本県水俣市にて南九州サークル懇談会が開催された。(33) 南九州サークル懇談会は、第一回総会に参加した南九州のメンバーの呼びかけによって実現した。この懇談会には、鹿児島、枕崎、

加世田、出水、水俣、鏡、熊本、阿蘇、福岡、八幡、糸島、そして『サークル村』事務局から九〇名のメンバーが参加した。座談会の記録「混沌と貧乏と懐疑と――サークルの根に渦まくものを追って」より、少なくとも、水俣木曜会、トントンの会、鏡町民懇談会、ノラの会、熊本青年合唱団、阿蘇文化の会、熊本県庁文学サークル（以上熊本県）、枕崎映画サークル協議会、原点の会、加世田文学サークル、生活を記録する会、いずみの友、盗火、米ノ津青年団、加世田演劇サークル（以上鹿児島県）、だるま会、八幡製鉄文学サークル、糸島演劇サークル（以上福岡県）のメンバーが懇談会に参加したことが確認できる。[34]

○第二回総会

一九五九年七月二四日から二六日にかけて、熊本県阿蘇外輪山麓の旧五高道場で第二回総会が開催された。[35]第二回総会では、「現代社会におけるサークルの役割」について約一〇時間にわたる討論が行われた。第二回総会に参加したメンバーは約七〇名である。総会記録によれば、少なくとも、大正文学サークル、高松文学美術サークル、穂波読書会、福岡貯金局文学サークル、だるま会、どんぐりグループ、飯塚映画サークル、門鉄詩話会、田川演劇サークル（以上福岡県）、ノラの会、阿蘇文学サークル、木曜会、蒼林文学サークル（以上熊本県）、鹿児島映画サークル（鹿児島県）のメンバーが懇談会に参加した。[36]

ちなみに、第二回総会記録の末尾には、総会において各地に合評組織を作ることが決定されたと記されている。事務局は、宇部、八幡、田川、飯塚、遠賀、福岡、熊本、阿蘇、水俣、加世田、鹿児島、大分に合評組織を作ることを提案したようだ。[37]これらはいずれも複数のメンバーが活発に活動していた地域と推測できる。

○第三回総会

第三回総会は、雑誌休刊中の一九六〇年七月三〇日から三一日にかけて、中間市大正鉱業昭和寮で開催され、約四〇名が参加した。第三回総会は、共産党との関係破綻がもたらした混乱を拾収し、新たな一歩を踏み出すための重要な会議であった。発言者の顔ぶれ（オブザーバーをのぞくと一七名）[38]から判断する限り、総会の参加者は、福岡市および中間市周辺に居住する谷川雁との人的結びつきの強いメンバーに傾斜している。

(3)交流実践

編集委員・運営委員の顔ぶれやサークルの分布から、『サークル村』の運動には、九州七県および山口県の全域から、様々なバックグラウンドを持ったサークル運動家が参加していたことが確認できた。さらに、メンバー同士の間に、「異質の要素の同一平面における対立相克」[39]を含んだ「交流」を現実化すべく、様々なユニークな活動が試みられた。以下では、『サークル村』における交流実践について概観する。

○総会・懇談会

総会と懇談会は、会員同士が一堂に会して直接交流を行う重要な機会であった[40]。各総会・懇談会の日程、内容、参加者については、前述したとおりであるが、第二回総会と南九州サークル懇談会が、南九州（熊本）で開催されたことが持つ意義を改めて確認しておきたい[41]。南九州での会合の開催は、北九州の文化的ヘゲモニーを相対化すると同時に、南北九州を架橋する象徴的・実質的な意味を含んでいた。なお、南九州サークル懇談会では、南九州のサークルの置かれている困難な状況が多くの活動家から報告された[42]。

○職場訪問

『サークル村』の運動では、地域と並んで職業の違いによるメンバー間の断層がクローズアップされた。職業を異にするメンバーの交流の試みとして、まず職場訪問を挙げることができる。一九五八年一〇月、福岡貯金局文学サークルのメンバーが、大正中鶴労働組合文学サークルのメンバーの案内により大正中鶴炭鉱を見学した。『サークル村』第一巻第三号（一九五八年一一月）掲載の小特集「ぼくたちは闇に会ってきた」には、福岡貯金局文学サークルのメンバー六名の感想が収録されている[43]。また、一九五八年一一月には、第一回総会に集ったメンバーが八幡製鉄企業祭に参加した[44]。

○「往復書簡」

『サークル村』誌上の「往復書簡」、「内政干渉」は、地域や職業など異なるバックグラウンドを持つメンバー間のユニークな交流の場であった。「往復書簡」の欄では、異なる職場・サークルに所属する二者の間で手紙がとり交わされた。その顔ぶれは、佐々省三郎（本名田村和雅、八幡製鉄労組）と千々和英行（香月町青年会[45]）、染川雅（阿蘇文化の会）と杉原茂雄（大正炭鉱文学サークル[46]）、斉田栄子・多野久子（ノラの会）と鹿島邦子・八雲圭生（九州大学[47]）、梶塚公雄（小富士村演劇グループ）と美登幸吉（金曜会[48]）、大島寿二（長周新聞社）と松田軍造（門鉄詩話会[49]）、郷田良（鹿児島県川辺郡）と中島博明（杵島炭鉱[50]）、中村卓美（八幡製鉄）と田中巌（福岡貯金局[51]）である。これらの組み合わせは、「異質な要素」の交流が現実化されていたことを裏付ける[52]。

「往復書簡」では、事務局の思惑通り、異なるバックグラウンドを持ったメンバー間の「対立相克」が浮き彫りになった。たとえば、八幡製鉄労組文学サークルの佐々省三郎と香月町青年会の千々和英行による「往復書簡」では、八幡

製鉄の労働者と近隣の農家の間のアンビバレントな関係が問題化された[53]。千々和によれば、近隣の農家の子弟にとって八幡製鉄はあこがれの就職先であり、彼らは運良く製鉄所に就職すると、青年団から脱退し、やがて意中の娘と結婚して村を離れてしまう。製鉄所の労働者と農民の非対称的な関係の下で、労働者は農民を「百姓」ではなく「百」と呼び捨てにして見下し、農民は労働者を農村の「やどかり」と呼んで腹いせをする。八幡製鉄の佐々は、「頑健で従順な」農民の雇用が八幡製鉄の労務管理政策に基づくものであることを指摘した上で、農民を「百」と名指すような労働者は労働者の連帯を乱す「マイナス部分」であると断言した。

千々和と佐々のやりとりは、さらなる議論を巻き起こした。八幡製鉄文学サークルの北方博は八幡製鉄の労働者の組合や会社に対する「〈やどかり〉的な性格」を自己批判した[54]。また、小富士村演劇グループの梶塚公雄は、鹿児島の金山の例を挙げながら、「労働者・農民両者から裏切者の烙印を押される」、〈やどかり〉的な兼業農家が体現している「百姓根性」を問題化した[55]。さらに、佐々省三郎は北方博の論をふまえて、御用化しつつある労働組合の現状について、批判的な問題提起を行った[56]。

○「内政干渉」

「内政干渉」は、メンバーが所属する労働組合やサークルに対して、「内政干渉」めいた批判的な意見を述べる欄である。この欄でも、通常、異なるバックグラウンドを持つ二者の文章が並列して掲載された。その組み合わせは、木村日出夫（『山田文学』）と福森隆（福岡貯金局[57]）、花田克己（『まきやぐら』）と永淵龍男（八幡製鉄文学サークル[58]）、大野二郎（熊本県庁蒼林）と田中巖（福岡貯金局[59]）、佐々省三郎（八幡製鉄労組）と大野二郎（熊本県庁蒼林[60]）、そして、松本道夫（水俣）と宮元和男（加世田文学サークル）であった[61]。

全体として、「内政干渉」に掲載された文章のトーンは、「往復書簡」以上に辛辣であった。たとえば、南九州サークル懇談会について、熊本県庁蒼林の大野二郎は、「福岡の文化人」というタイトルの下で、「福岡勢の指導者的姿勢」をやり玉にあげた。大野によれば、「福岡勢の発言には資料収集的な好奇心が強」く、南九州と「福岡勢」の関係は、「原料供給圏」と「その加工、再生産圏」さながらである。また大野は、南九州サークル懇談会において南北九州の間に「対立」を見出すべく、「テンポが早くて鋭」い北九州と「のろまでにぶい」南九州、「工場と炭鉱地帯」の北九州と「農村水産つまり原始生産地帯である」南九州といった安易な類型化が行われたことを厳しく批判した[62]。他方で、福岡貯金局の田中巖は、大野による批判が「恐ろしい程の事実のわい曲」を含んでいると抗弁し、同時に、懇談会の場で「熊本市が水俣以南の人たちからういていた」ことを挑発的に指摘した[63]。

○詩、短歌、小説、生活記録、ルポルタージュ、聞き書きなど

『サークル村』誌上には、一般の文学サークル誌と同様に、多様なジャンルの作品が数多く掲載された。これらの作品の多くは、地域や職場の状況に基づいて執筆されたため、異なるバックグラウンドを持つメンバーが互いの状況について理解を深める重要な契機となった。

メンバーの構成を反映して、炭鉱労働者を対象とする作品が目立った。たとえば、沖田活美（大正鉱業）や山本詞（古川目尾）は、炭鉱労働を短歌に詠んだ[64]。玉木誠（宇部興産東見初）は、詩「兄弟よ憎しみを」[65]に、「硬の下敷きになって」死んだ父や落盤で労働能力を失った兄への思いを託した。山崎喜与志（日炭高松）は、小説「身売り――暮しの窓より」[66]や「つぎ目」[67]において、炭鉱労働者の家族の状況をリアリズム的な手法で描いた。花田克己（宇部興産東見初）は、生活記録「坑夫の財産」[68]において、炭鉱で勤務中に感電死した父の思い出を綴った。上野英之信（英信）

は、「黒い朝」[69]、「ぼた山と陥落と雷魚と」[70]、「伝八がバケモノをみた話」[71]、「大回転」[72]など、炭鉱を舞台とするユニークな小説を発表する一方で、中興江口炭坑の水没事故をルポルタージュ「裂」[73]にまとめた。森崎和江は連載「スラをひく女たち」[74]において、聞き書きの手法を用いて戦前の女坑夫の肉声を復元した。

南九州の社会状況を対象化した作品も少なくない。南（角南）俊輔（鹿児島・生活を記録する会）は、小説「ぢずり」[75]で、大阪の紡績会社で働く娘を見守る故郷の母親の姿を描いた。ルポルタージュ「輪廻――南九州出稼ぎ地帯の考察」[76]でも、南は貧困を背景とする南九州の未婚女性の出稼ぎの問題を扱った。「輪廻」において、南は、紡績会社の出張所が都市の工場と農村を巧みに接続し、女工の周旋と労務管理の上で大きな役割を果たしていること、また、出稼ぎ女工を結婚と退社へと誘導することによって、会社が農村の女性の人生を領有していることを鋭く抉り出した。椋田修（本名岡本達明）と石（牟礼）道子（トントンの会）によるルポルタージュ「南九州のサークルの根」[77]は、南九州の地域社会の状況に肉薄し、多数派の零細農民と、兼業公務員・兼業農家・兼業工場労務者・兼業漁民・兼業商人などの相対的に豊かな階層とを隔てる断層を浮かび上がらせた。興味深いのは、このルポが、地域社会に内在する階層構造を背景として、「文化」が住民の上昇志向と深く結びついていることを問題提起したことである。筆者は、サークルが「苦しい生活」から目をそらし「中間性」を満足させる場として機能していることを指摘し、「底辺と絶縁した」サークル運動の意味を批判的に問い直した。さらに、石牟礼道子は、「愛情論」[78]において、故郷水俣における男女の関係性を主題化し、「奇病（水俣湾漁民のルポルタージュ）」[79]では、聞き書きの手法を用いながら水俣病患者の姿を印象的に描いた。さらに、中村きい子は、「かやかべ」[80]、「間引子」[81]などの鹿児島の土着的世界を素材とした小説を発表した。

二　中間周辺のサークルネットワーク

第一節で詳しく検討したとおり、『サークル村』の運動には九州七県および山口県におよぶ広い範囲から多数のサークル運動家が参加した。中でも、事務局周辺で活動するサークル運動家が果たした役割は大きかった。「第二期」の運営委員中に占める近隣地域在住のメンバーの比重の高さについてはすでに見たとおりが、彼ら彼女らの多くは創刊時より熱心な会員として事務局に足繁く出入りし、運動を支えた。九州七県と山口県の全域におよぶ「巨大サークル」を創出する実験として『サークル村』を捉える際には看過されがちであるが、『サークル村』の運動は、何よりもまず、炭鉱労働者を中心とする地域のサークル運動家のネットワークを基盤として実現した。本節では、聞き取り調査の成果もふまえながら、この点を明らかにしていきたい。

(1)直接交流の場としての事務局と谷川雁

『サークル村』の事務局は、中間市本町の上野英信・谷川雁・森崎和江の住居におかれた。一九五七年一月より、上野英信が妻春子と共に住んでいた「軒つづき」の隣家に谷川・森崎のカップルが入居したのは、一九五八年六月のことである[82]。『サークル村』はその三ヶ月後に創刊された。

森崎和江が「事務局にはしじゅう会員や外来者が出入りしていた[83]」と述べるとおり、事務局は近隣地域在住の会員のたまり場となっていたようだ。「第二期」の運営委員を務めた村田久は、「『サークル村』の時代、仕事を終えた後に

週三回くらい谷川雁の家に行った。夕食を出してもらうこともあった」と述べる。[84] 村田にとって、『サークル村』とは、「雑誌よりも谷川雁のところに出入りしていたメンバーとの日常的な交流」であった。村田は、『サークル村』の熱心なメンバーの中には、「第二期」の運営委員に名を連ねた古川実や香月寿のように、ほぼまったく雑誌に文章を発表していない者が何人もいたことを強調する。村田によれば、「雑誌から『サークル村』が何であったのかを判断することはできない」。後述するように、村田は、『サークル村』創刊以前より香月町で活発にサークル運動を展開していたが、中間を拠点として活動していた古川実や、大正鉱業や日炭高松など炭鉱関係の運動家とは『サークル村』を通じて知り合ったという。なお、村田よると、事務局に日常的に出入りしていたメンバーの大半は中間・水巻・香月など近隣地域の在住者であったが、福岡貯金局のメンバーのみは福岡市から中間市にある事務局に頻繁に足を運んでいたという。[85]

事務局を中心として濃密な対面空間が形成され得たのは、カリスマ的なオルガナイザーであった谷川雁によるところが大きい。後に大正行動隊の中心メンバーとなる小日向哲也は、出会ってすぐに谷川に魅了された運動家の一人である。上野英信宅に「毎日のように出入り」していた小日向は、ある日上野宅で谷川に出会ったという。やがて谷川と論争になって、小日向は「こてんぱんにやられた」。再度、谷川を訪ねたが「再びやられた」。共産党員だった小日向は、二度の論争で、谷川に教条主義を厳しく批判されたという。小日向は、悔しさのあまりしばらく谷川宅から足が遠のいたが、次に会うと、谷川は小日向を「とりこみにかかってきた」。やがて、谷川は小日向が事務局に顔を出さないと「腹かく」（怒る）ようになったという。[86]

谷川は、親分的な面倒見の良さと巧みな話術によって、多くの労働者の心を捉えた。小日向によると、谷川は会話

の達人だった。『サークル村』誌上では、谷川の文章の難解さが繰り返し批判されたが、対面空間では、谷川は、とても平易な言葉で話をした。多くのメンバーは、谷川の話術に魅了され、谷川に対してしばしば生涯にわたる親愛の情をいだくようになった。

前節で詳しく論じたとおり、『サークル村』には多様なサークル運動家が参加したが、メンバーを相互に媒介したのは谷川雁であった。森崎和江は、「村人相互は彼等にとって互に飛び石だった」と述べている[87]。さらに、『サークル村』の運動は、谷川とメンバーの親密な人的結びつきによって支えられた。たとえば、『サークル村』を創刊するために田中巌は転居して多額の資金を工面した[88]。また、加藤重一は、『赤旗』誌上で谷川雁が除名処分になったことを知ると、急遽飯塚から中間に駆けつけた。「第二期」において、加藤はガリ切りを一手に引き受けるなど、財政難と人手不足が慢性化していた『サークル村』を献身的に支えた[89]。

(2)上野英信と地域のサークルネットワーク

『サークル村』の元メンバーの聞き取りから、谷川雁と上野英信の性格の対照性が鮮明に浮かび上がってくる。古川実によれば、上野は「とっつきにくい」。他方で、谷川は、「相手にうまく合わせ」て結果的に「とりこむ[90]」。小日向哲也によれば、上野は、礼儀作法にうるさく、尊敬されたり「先生」と呼ばれたりすることを好むのに対し、谷川は礼儀には無頓着で「先生」扱いを嫌う[91]。上田博によれば、谷川は「強烈」で「君臨するタイプ」だが[92]、村田久によれば、上野は「地味」で「コツコツやるタイプ[93]」。『サークル村』の運動においても、谷川の華やかな情宣活動の傍らで[94]、上野は、当初、「縁の下の力持ち」的な『サークル村』の事務を一手に担った。

こうしたキャラクターの違いから、谷川雁が中間に移り住むと、上野英信の存在はかすんでしまったようだ。たとえば、生涯を通じて熱烈な谷川ファンとなる小日向は、先に述べたように、元々上野英信を慕い毎日のように上野宅に出入りしていた。小日向のみでなく、上田博にせよ、阪田勝にせよ、香月寿にせよ、村田久にせよ、『サークル村』のメンバーのうち、炭鉱関係のサークル運動家と事務局周辺のサークル運動家の多くは、『サークル村』創刊以前から上野とつきあいがあった。しかも、上野が多くのサークル運動家の知己を得たのは偶然によるものではなく、時間をかけて地域のサークル運動家をオルグしてきた結果である。

しかし、カリスマ的なオルガナイザーであった谷川の出現後、谷川は「上野が地道に作り上げたサークル［のネットワーク――引用者注］を持って行ってしまった」[95]。より直裁に述べるならば、上野は谷川に「〝生徒〟を取られた」[96]。次の一件は、上野が谷川に「〝生徒〟を取られた」ことをどれほど苦々しく思っていたかをうかがわせる。「第一期」の末期、阪田勝は、谷川に連れられて新興宗教の道場を見学し、得意の速記で記録をとり、谷川の求めに従って「宇中をのぞく宗教――あなない教探訪記」[97]を執筆した。この訪問記が『サークル村』に掲載されると、阪田は上野から「雁の亜流になった」といって、「ものすごい剣幕」で怒られたという[98]。

さて、先述したように、谷川が南九州から北九州に移住する以前に、上野は筑豊の炭鉱労働者の間に、また、中間・水巻・香月周辺で活動する運動家の間に、独自のネットワークを作りあげていた[99]。「上野［が］みずから坑内夫として得た経験を軸に、筑豊炭田の内外で彼らしい地味な影響力をもっていた」[100]ことをよく知っていた谷川は、筑豊の運動家に対する上野の大きな影響力を計算に入れながら、『サークル村』の運動を構想した。言い方を変えれば、『サークル村』の運動は、上野が作り上げた筑豊の運動家のネットワークを取り込むことによって実現された[101]。

以下では、上野英信の役割を中心にして、『サークル村』の運動の基盤となった筑豊のサークル運動や、サークル運動家同士のネットワークについて検討する。[102]

①炭鉱のサークル運動家と上野英信

炭鉱は、一九五〇年代当時サークル運動が極めて盛んであった産業部門の一つである。[103]文化誌『月刊炭労』の発行など、サークル支援のための炭労による取り組みも奏功して、一九五〇年代半ば頃にはサークル運動家同士の交流も活発化した。有名な炭鉱のサークル運動家であった上野は、サークル運動の活性化とサークル運動家同士の交流の促進に大きく貢献した。上野が地道に作り上げた炭鉱のサークル運動家のネットワークは、『サークル村』の重要な基盤となった。以下では、上野英信と炭鉱のサークル運動との関わりについて論じたい。[104]

○日炭高松と上野英信

サークル運動家としての上野英信の原点は、日炭高松（日本炭礦高松）である。日炭高松は中間に隣接する水巻に位置し、労働組合運動とサークル運動が極めて活発なことで知られた。

上野英信は、日炭に一九四八年初頭より一九五〇年三月まで勤務した。この間に上野は独身寮の温雅荘で『労働芸術』を発行している。その後上野は崎戸鉱業所勤務を経て一九五三年一月に日炭に再就職するが、真鍋呉夫事件により五月に退職を余儀なくされた。しかし、上野は退職後も水巻に留まり、日炭の文学サークル運動に参加した。上野がサークル運動家としてめざましい活動を展開するのは、退職後のことと言って良い。

退職直後、上野は、日炭の労働者と共に筑豊炭坑労働者工作者集団を結成し、一九五三年五月から翌五四年三月ま

でガリ版刷りの文芸誌『地下戦線』を発行した（全五号）。やがて上野は、『地下戦線』第五号に発表した「あひるのうた」を皮切りに、童話風の物語を書き始める。上野は、その執筆動機を、「きびしい冬の時代」に突入しつつあった筑豊の炭鉱労働者が、「手にとってくれるような、そして力づけられるような、そんな読みものを作ってみたいという思いにかられての発想」だったと述べている[105]。続いて書かれた「せんぷりせんじが笑った！」、「はじめての発言」、「みんなで書いたラクガキ」、「親と子の夜」は、一九五四年一一月に日炭高松の採炭夫千田梅二の版画とセットで『絵ばなし集・せんぷりせんじが笑った』にまとめられた[106]。『絵ばなし集』は、すべて手作業で制作された。上野がガリ版によって文章を印刷した後、千田が「五十七点にのぼる版画を、墨と刷毛とバレンを使って、いちいち各ページに刷りこ」んだ。「「絵ばなし集」は、これまでになく熱い共感をもってヤマの仲間たちに迎え入れられた」。さらに、翌一九五五年には、上野は千田と共に『ひとくわぼり』を制作した[107]。

上野は、一九五五年後半より原爆症療養などのためしばらく水巻を離れるが、五六年二月に再び水巻に戻り、五七年一月以降は、後に『サークル村』の事務局が置かれることになる中間に移り住んだ。『サークル村』創刊まで、上野は『月刊たかまつ』の発行など日炭のサークル運動に関わりながら、筑豊各地の中小炭鉱を回りルポルタージュを手がけた。

日炭の先進的な文学サークル運動は各地のサークルに大きな影響を与えた。たとえば、表紙に千田梅二の版画を用いた『地下戦線』の影響によって、「表紙に版画を使うことが、さまざまのヤマの文芸サークル誌の一つの流れとなった[108]」。版画の表紙絵は『サークル村』の運動でも継承されたが、もともと上野の発案によるものだった。上野は、一九四八年に独身寮「温雅荘」の機関誌の表紙を飾るために千田梅二に版画の制作を依頼した[109]。

『地下戦線』は、上野英信の存在を、各地のサークル運動家に知らしめる大きなきっかけになったと考えられる。しかし、上野英信を、炭鉱労働者の間で一躍有名にしたのは何よりも『絵ばなし集』であった。宇部興産東見初炭鉱の文学サークル誌『まきやぐら』第九号（一九五五年新年号）に記載された花田克己による「編集後記」は、『絵ばなし集』がサークル運動家に与えた衝撃の大きさを物語る。

先日、寄贈されました、日炭高松の人たちの作られた「せんぷりせんじが笑った」を読みましたとき、まきやぐらが続いて出ることに気を良くしていた私たちはグァンと叩きつけられた様な気がしました。何のために、そして誰のために書いているのかということは、サークルで問題になったことはあるけれど、その掘り下げ方が如何にエエコロハチベエであったかということがわかったのです。（略）まきやぐらに載る作品の質の高くなってゆくことは確かに大切なことですが、一緒に働いている仲間たちから〝まきやぐら〟が引張りダコになることがそれ以上に大切なことではないでせうか。[10]

炭労も、上野の「絵ばなし」に対して破格の扱いを行った。一九五五年一月から五六年六月まで、炭労は『炭労新聞』の文化面に、上野の絵ばなし「せんぷりせんじが笑った」、「はじめての発言」、「みんなで書いたラクガキ」、「親と子の夜」、「ひとくわぼり」を連載した。「ひとくわぼり」の連載終了後には感想文の募集が行われ、一九五六年七月二〇日付けの『炭労新聞』にはほぼ一面全体を使って複数の組合員の感想が掲載された。また、炭労教宣部は、「せんぷりせんじが笑った」と「ひとくわぼり」の幻灯を制作したが、幻灯は各地の炭鉱で上映され、好評を博した。[11] さら

に、三井山野炭鉱では、三井山野文芸サークルの三木喬太の脚色によって、「ひとくわぼり」が舞台で上演された。[112]

○炭労系の文学サークル運動家と上野英信

各地の炭鉱では、一九五三年頃から、レッド・パージ後停滞していたサークル運動がにわかに再生しつつあった。その意味で、『地下戦線』や『絵ばなし集』に見られる上野英信のめざましい活躍は、時宜を得たものであった。前掲拙稿「炭鉱におけるサークル運動の展開」において詳しく論じたように、こうしたサークル運動の活発化を反映して、一九五四年六月号より、炭労の月刊誌『炭労』（一九五四年九月号より『月刊炭労』に名称変更）は、資料雑誌から学習雑誌・文化誌として誌面を一新した。以後、『月刊炭労』は、サークル運動の振興とサークル運動家の交流の促進に大きな役割を果たすことになった。

「第一期」の編集委員、花田克己と木村日出夫を始めとして、『サークル村』に集った炭鉱関係のサークル運動家の中には、『月刊炭労』の「常連」と言い得る書き手が少なくなかった。とくに、『月刊炭労』誌上では、一九五四年以降、毎年文芸コンクールが開催され、その結果が新年号に発表される慣行があったが、各地の熱心な文学サークル運動家たちは、こぞってこのコンクールに応募した。『サークル村』が創刊される直前に刊行された一九五八年の「新年文芸特集号」を見ると、入賞者（佳作・選外佳作を含む）中に、後の『サークル村』の会員を数多く確認することができる。[113] 創作の部では、岩田まき（入選・古川下山田）、安永健次郎（佳作・九州採炭）[114]、山崎喜与志（佳作・日炭高松）、詩の部では、木村日出夫（入選・三菱上山田）、花田克己（入選・宇部興産東見初）、短歌の部では、山本詞（入選・古川目尾）、筧邦雄（入選・日炭高松）、沖田活美（選外佳作・大正）である。筑豊の運動家に限定するならば、入賞者かなりの割合を（将来の）『サークル村』の会員が占めていたということができる。

おそらくこれは偶然ではあるまい。まず、サークル運動が活発化した一九五〇年代半ばには、名の知れたサークル運動家同士の間で、サークル誌の交換、手紙のやりとり、サークル訪問など、様々な回路を通じて交流が進みつつあった。その際、『月刊炭労』が、各地のサークルやサークル運動家が互いを知る重要な契機となっていたことは想像に難くない。

上野英信は、炭鉱のサークル運動を活性化しサークル運動家同士を結びつけるために大きな力を注いだ。各地の炭鉱で発行されていたサークル誌を丁寧に読むと、上野が、かなり早い時期から各地の運動家とコンタクトをとっていたこと、さらに各地の運動家に対して一種のアドバイザー的な役割を果たしていたことが確認できる。たとえば、『まきやぐら』第一六号（一九五五年一〇月）の「編集後記」は、上野英信が来訪したことを、また翌一七号（一九五五年一一月）の「編集後記」は、上野が花田の求めに応じて「興炭労文芸大会」に参加したことを報告している。後者では、この大会について、「上野英信さんの話、それぞれの意味で感銘をうけ、又考えさせられたことと思う」という感想が述べられている。三菱上山田炭鉱で発行されていた『山田文学』第二六号（発行時期は、一九五六年九月と推定される）の「編集後記」には、「八月五日　宇部地区より　花田克己（まきやぐら）竹田有佑、中西圭助（カヴェルネ）せんぷりせんじが笑った　ひとくわぼりの作者、上野英信諸氏の来訪　懇談会」という報告がある。また、同じ「編集後記」中の、「今月号より、他のサークル誌の作品を紹介する欄を設けた。上野英信氏の助言により他のサークル誌とのより一層の交流を計りたいと思います」という記述は、来訪時に上野英信がサークル活動についてのアドバイスを行ったことを示唆している。

上野のサポートを通じて形成された筑豊のサークル運動家のネットワークは、『サークル村』の重要な土台となった。

一九五七年一〇月二〇日には第一回筑豊文学サークル懇話会が開催され、上山田、山野、二瀬、九州採炭、日炭高松、大正、田川、木城のサークル運動家が集った。この会合で上野は司会を務めた[115]。それから約半年後に中間で同様の集まりが開催された。『裸像』第一六号（一九五八年四月）の「編集後記」は、「また一三日［一九五八年四月一三日――引用者注］は、詩人谷川雁、森崎和枝(ママ)両氏を当地に迎えて、山田、高松、古河、木城、大正など各サークルが参加し、座談会をもっ」たと報告している。どの段階で『サークル村』の運動の構想を谷川と上野が共有するに至ったのかは不明である。ともかく、上野が構築した炭鉱の文学サークル運動家のネットワークは、谷川によって『サークル村』の運動にしっかりと組み込まれた。

②中間周辺のサークル運動家と上野英信

上野英信は、日炭を解雇されてから一九五九年夏に『サークル村』事務局を離れて福岡市茶園谷に移るまで、水巻町、香月町（八幡市）、中間市（町）を転々としながら、地域のサークル運動家と交流を深めた。以下に、一九五三年以後『サークル村』創刊に至る上野の居住地を時間順に書き出してみる[116]。

一九五三・五～　遠賀郡水巻町御輪地・副田キク方
一九五四・八～　遠賀郡香月町上香月・香月寿方
一九五四・一一～　遠賀郡水巻町
一九五五・九～　山口県阿知須

一九五五・一二～　嘉穂郡二瀬町相田地区
一九五六・一～　八幡市折尾
一九五六・五～　遠賀郡水巻町・野崎清一方
一九五七・一～　遠賀郡中間町本町

日炭解雇後の上野は、阿知須で原爆症の療養を行っていた一九五五年後半と、相田と折尾に居住したごくわずかの期間をのぞいて、水巻町、香月町（一九五五年四月一日より八幡市に編入）、中間町（一九五八年一一月一日より市制施行、中間市となる）を転々とした。なお、水巻・香月・中間は、地理的には中間を挟んで隣接していた（図1参照）。日炭解雇後、上野が狭い圏内で転居を繰り返していたことがわかる。このうち、香月町は一九五五年四月に八幡市に編入されるまで、中間町は市制が施行される一九五八年一一月まで、水巻町と同じく遠賀郡に属していた。また、水巻、中間、香月は、いずれも炭鉱町で、水巻には日炭高松が、中間には大正鉱業と九州採炭が、香月には九州採炭や貝島大辻炭鉱があった。こうした背景から、伝統的に三つの地域の関係は深かった。メーデーの開催も遠賀郡を単位として行われ、隔年で水巻の日炭高松の一坑グラウンドと中間の大正鉱業のグラウンドが会場として用いられていたようだ。

事務局周辺で『サークル村』に参加したメンバーには、日炭高松、大正鉱業、香月町青年団体協議会のいずれかに所属していたサークル運動家が多いが、これらの拠点（水巻、中間、香月）が上野の居住地と重なるのは偶然ではない。というのも、上野は、居住地域の運動家と交流しながら事務局周辺のサークル運動家のネットワークを作り上げ

図 1　中間市周辺地図

（出典　「福岡県　市町村合併新旧対照地図」国際地学協会編『新日本分県地図　地名総鑑・公共施設一覧』国際地学協会、1970 年）

ていったからである。もちろん、水巻、香月、中間におけるサークル運動家のネットワーク作りは、より広い範囲における炭鉱のサークル運動家のネットワーク作りと平行して行われ、その対象はかなりの程度重なっていた。

ただし、香月町については例外的である。上野は、香月町において、青年団体協議会（以下青協と略）のサークル運動家と交流を深めるが、その中心は炭鉱労働者ではなかった。やがて、青協の中心的な運動家は『サークル村』の運動の熱心なメンバーとなった。青協のサークル運動家と上野英信の関わりはどのようなものだったのか。

「第一期」『サークル村』の最終号[11]に掲載された千々和英行「『百』と『やどがり』――香月町青協の赤字決算書」によると、レッド・パージ後の民主的文化運動の再生期にあたる一九五二年に、香月町では、各地域の青年団を母体として、「交流」を目的とした青協が結成された。その中核は「農村青年層」によって担われたが、一九五三年には、従来青年団運動から隔絶されていた大辻炭鉱の青年も青協に加入するようになった。村田久は、農村の青年の集まりであった伝統的な青年団と違って、職業の枠を越える同世代の交流を実現したところに青協のユニークな特徴があったと述べる。村田自身も農民ではなく会社員（三菱化成勤務）だった。炭鉱労働者との交流に関係して、村田は、「夜、仕事の後に会合に行って遅くまで議論をした後に、大辻炭鉱のドロドロの独特な匂いのする風呂に入りに行って夜半まで議論の続きをした」ことを懐かしく思い出すという[18]。

さて、やがてこの青協を母体として様々なサークルが誕生した。

農村青年層は、各地域にあった、四Hクラブを農協青年部として統一し、農作物の研究を運営の中心として発足した。大演芸文化祭において結集された演劇活動を契機として、失業者、半失業者を中心とした演劇研究会ができ、

青年団未加入者を含めた文学研究会、二十九年終り頃から青協の理事に参加した若い一部の通勤労働者よりなる、ダルマ会が成立した。それらの活動家が歌声を指導し、一部社研に集まった。[119]

右のサークルのうち、やがて『サークル村』の会員となる香月寿や阪田勝は演劇研究会の、千々和和行は文学研究会の、村田久はだるま会のリーダーだった。なお、香月、阪田、千々和、村田のいずれも農民ではなく、[120]村田以外の三者は共産党員だった。

上野英信が香月寿宅に下宿を始めると、青協のサークル運動家は上野と親しく交わるようになった。村田も、阪田も、上野が香月宅に下宿していた期間中に上野と知り合いになった。阪田は、この時期に上野から執筆中の『ひとくわぼり』のあらすじを聞かされたことを記憶しているという。上野が、物語の初めから終わりまで朗読するように時間をかけて話をしてくれたので、「申し訳ない気がした」とのことである。[121]小日向が「上野さんの親衛隊長」と評する[122]千々和の家では、文学サークルの集まりが頻繁に開かれていたようだ。上野は千々和をリーダーとする文学サークルの「チューター的」な役割を担っていたという。また、香月町の公民館では時折上野を囲む会も開かれた。[123]

上野が香月町を去った後も、上野と青協の中心的な運動家との関係は途絶えなかった。青協のサークル運動家を『サークル村』の運動に勧誘したのは上野である。しかも香月線で結ばれた中間の事務局は、香月の運動家にとってアクセスが容易だった。結果的に、事務局が水巻・香月・中間の中心に位置する中間におかれたことは、事務局周辺のサークル運動家を結びつける上でプラスに作用したと考えられる。

なお、中間の住居を上野に「世話した」のは、大正鉱業の中心的なサークル運動家の小日向哲也だった。小日向は、

一九五四年頃、上野の知己だった定時制高校の恩師を通じて上野と知り合った。ほどなくして、小日向は千田梅二宅で『せんぷりせんじが笑った』の版画を刷る作業に加勢したという。その後、小日向は何度か恩師と共に上野宅を訪れた。上野が中間に移ると、小日向は「毎日のように」上野宅に出入りするようになったという[124]。『サークル村』創刊までの、上野の中間での活動については詳しい情報は得られていないが、大正鉱業のサークル運動家や古川実のような地域の運動家との交流を深めたことが推測できる。

これまで述べてきたように、上野は、水巻・香月・中間を転々としながら、地道にサークル運動家のネットワークを作り上げた。ただし、それは一九五〇年代のサークル運動に特徴的だった「交流」の志向性と、それを前提とする重層的なサークル運動家のネットワークの存在を前提として初めて可能になったことを忘れてはならない。

たとえば、香月町青年団体協議会は、先述したように、青年団同士の交流を目的として組織され、職業の枠を越える運動家同士の横断的な結びつきを作り出すことに成功した。他方で、小日向は、『サークル村』創刊以前から、大正鉱業の労働者以外の地域のサークル運動家をある程度知っていたと述べる。その回路の一つはうたごえ運動だった。一九五四年頃から職場でうたごえサークルに参加していた小日向は、うたごえ運動を通じて、日炭高松など地域のうたごえ運動家と交流する機会を持った[125]。香月青協の阪田勝も、小日向とうたごえ運動を通じて知り合ったと述べている[126]。こうした証言は、一九五〇年代半ば頃より産業部門や地域を基盤として、サークル運動家同士の横断的な交流が活発化していたことをうかがわせる。

おわりに

本稿で詳しく論じたように、九州・山口に「巨大サークル」を組織することを目指した『サークル村』の運動は、多様なサークル運動家を大規模にネットワーク化することで実現した。『サークル村』の運動に参加したサークル運動家の顔ぶれとユニークな交流実践を検討した結果、メンバーの間で、「異質の要素の同一平面における対立相克」としての「交流」が現実のものとなっていたことが確認できた。つまり、『サークル村』の運動は、地域や職業など異なるバックグラウンドを持ったサークル運動家を出会わせ、交流する機会を作り出すことに成功した。

また本稿では、事務局周辺のサークル運動家のネットワークに注目した。炭鉱労働者を中心とする事務局周辺のメンバーは、谷川雁と強く結びつきながら事務局を拠点として日常的な交流を行い、『サークル村』の運動を支えた。事務局周辺のサークル運動家のネットワークの形成に大きな役割を果たしたのは、元日炭高松の文学サークル運動家であった上野英信であった。上野英信は、炭鉱の文学サークル運動家としての高い知名度を背景に炭鉱のサークル運動家の交流を推進する一方で、水巻・中間・香月を転居しながら地域のサークル運動家と地道に交流を行い、ユニークなネットワークを作り上げた。事務局周辺のサークル運動家のネットワークは、『サークル村』の運動において欠くことのできない重要な基盤となった。

注

（1）二〇〇六年には不二出版から復刻版が刊行された。『サークル村』についての主な先行研究としては、大沢真一郎「「サークル村」」思想の科学研究会編『共同研究集団』平凡社、一九七六年、松原新一『幻影のコンミューン――「サークル村」を検証する』創言社、二〇〇一年、池田浩士「サークル村の内と外――〈戦後〉が終わったとき、〈われわれ〉は……」『大転換期――「六〇年代」の光芒（文学史を読みかえる6）』インパクト出版会、二〇〇三年、拙稿「森崎和江と『サークル村』――一九六〇年前後の九州におけるリブの胎動」『思想』第九八〇号、二〇〇五年一二月、大嶽秀夫『新左翼の遺産――ニューレフトからポストモダンへ』東京大学出版会、二〇〇七年などを参照。

（2）以下は、拙稿「谷川雁の共同体論とサークル構想（上）（下）」、『思想』一〇二一・一〇二二号、二〇〇九年五・六月を参照。

（3）『サークル村』第一巻第一号、一九五八年九月、三頁。

（4）『サークル村』第一巻第一号、一九五八年九月、四八頁。

（5）『影の越境をめぐって』現代思潮社、一九六三年所収。初出は、『思想の科学』、一九六二年六月。

（6）『谷川雁セレクションⅠ――工作者の論理と背理』日本経済評論社、二〇〇九年所収。初出は、『国民文化』第三号、一九五九年二月。

（7）「報告風の不満――九州の情勢をめぐって」、三三二頁。

（8）表一は、主として、『サークル村』、前掲松原『幻影のコンミューン――「サークル村」を検証する』、筆者自身による聞き取りに基づいて作成した。

（9）第四巻第二号（一九六一年二・三月）以降は、「運営委員」の氏名は示されていない。

（10）谷川雁は、水俣で療養生活を送る間に、熊本県の多くの文学サークル運動家と知り合いになったようである（谷川雁『原点が存在する』一九五八＝一九七六年、潮出版社に「しおり」として添付された、渡辺京二「わが谷川雁」による）。また、三嶽公子と井上洋子によると、『サークル村』が創刊される直前に、谷川は、『原点』を発行していた中村きい子・飯島弘夫妻を鹿児島に訪ねている。なお、『原点』からは郷田良（本名松下志朗）も『サークル村』に参加している（二〇〇八年一一月二二日開催の公開シンポジウム「福岡の戦後文化運動とその拡がり――大西巨人展にちなんで――」における三嶽公子の報告「中村きい子と「原点」「無名通信」および

井上洋子によるコメントによる）。

（11）神谷国善『労働者作曲家　荒木栄の歌と生涯』新日本出版社、一九八五年、五九頁。

（12）田中巌「ある職場サークルの年輪」『サークル村』第二巻第七号、一九五九年七月、九頁。

（13）同。田中巌「九州詩人大会を開く　九州詩話会」『会報（全逓詩人連盟結成準備委員会機関誌）』第二号、一九五八年一月八日も参照。

（14）村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一〇日）。

（15）茶園梨加「戦後サークル誌にみる文学の役割――北部九州のサークル誌①　日炭高松」『九大日文』第一三号、二〇〇九年、九九頁。

（16）森崎和江「「サークル村」当時の英信さん」上野英信追悼録刊行会編『追悼　上野英信』裏山書房、一九八九年、一四八頁。

（17）谷川は、一九五八年春に共産党福岡県委員会の文化部員となった。宮本忠人『地底からの雄叫び　炭鉱労働運動戦後史――日炭高松闘争の経験から』火陽出版社、二〇〇〇年、二二九頁。

（18）小日向哲也氏と村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日、二〇〇九年四月一〇日）。ただし、神谷は創刊号に「うたごえ四つの層」を寄稿している。

（19）『国鉄文化』一九五八年四月号、五〇頁。

（20）理由は不明である。

（21）「職場で生れるコトバ」『サークル村』第二巻第一一号、一九五九年一一月。

（22）村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一〇日）。

（23）古川実氏からの聞き取りによる（二〇〇七年三月八日）。

（24）加藤重一氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一一日）。

（25）「その二」以降は地域別のリストとなっている。「その二」は「鹿児島県加世田市の部」、「その三」は「熊本県の部」、「その四」は「大分県の部」、「その五」は「佐賀・長崎の部」である。

（26）「その二」（鹿児島県加世田市の部）には、各サークルの会員数も掲載されている。

（27）重複分は省いてある。

(28)「誌代回収のうったえ」『サークル村』第一巻第四号、一九五八年一二月、四八頁。

(29) とはいえ、同一のサークルから複数のメンバーが参加したケースが少なくなかったことを考えると、二〇一というサークル数はやや多すぎるように思われる。実際、リストをよく確認すると、複数のサークルの責任者を同一人物が務めているケースや、サークルとその連合体が重複してリストアップされているようなケースが散見される。

(30) 職業・産業部門意外にも、顕著な特徴が確認できるサークルについては適当と思われる分類項目を設定した。なお、サークルの性格を「住所」から類推したり、他の情報源から判断したりしたケースがある。

(31) ただし、「不明」に分類したサークルの多くは、「地域サークル」であったと推測できる。

(32)『サークル村』第一巻第四号、一九五八年一二月、二七頁。

(33) 以下は、「混沌と貧乏と懐疑と――サークルの根に渦まくものを追って」『サークル村』第二巻第一号、一九五九年一月参照。

(34) 発言が記録されている会員の所属サークルを拾い出した。

(35) 以下は、「現代社会におけるサークルの役割」『サークル村』第二巻第八号、一九五九年八月参照。

(36) 発言が記録されている会員の所属サークルを拾い出した。

(37)「サークル村」第二巻第八号、一九五九年八月、一二頁。

(38) 発言者（オブザーバーはのぞく）は、谷川雁、森崎和江、田中巌、福森隆、大長静代、村田久、香月寿、阪田勝、杉原茂雄、上田博、中村卓美、加藤重一、佐々木（?）、井手（?）、堤輝男、大野隆司、中村きい子の一七名（中村きい子以外はすべて福岡県在住者）である。

(39)「編集後記」『サークル村』第二巻第一一号、一九五九年一一月、四八頁。

(40) 事務局周辺における日常的な交流については第二節を参照。

(41) 谷川雁は、前掲「報告風の不満」において、第一回総会と南九州サークル懇談会を九州の南北を極とする「振子運動」にたとえ、「今後、九州の北と南で半年毎に交流集会をもつことが決定されている」と述べている（三三八頁）。

(42)「混沌と貧乏と懐疑と――サークルの根に渦まくものを追って」『サークル村』第二巻第一号、一九五九年一月。

(43)『サークル村』第一巻第三号、一九五八年一一月。

（44）「鉄の祭り・故郷の心臓の祭り――八幡製鉄起業祭に集まり・語り・そして疑った」『サークル村』第一巻第四号、一九五八年一二月。
（45）『サークル村』第一巻第一号、一九五八年九月。
（46）『サークル村』第一巻第二号、一九五八年一〇月。
（47）『サークル村』第一巻第四号、一九五八年一二月。
（48）『サークル村』第二巻第四号、一九五九年四月。
（49）『サークル村』第二巻第四号、一九五九年四月。
（50）『サークル村』第二巻第七号、一九五九年七月。
（51）『サークル村』第二巻第一〇号、一九五九年一〇月。
（52）『サークル村』第一巻第三号（一九五八年一一月）掲載の「往復書簡」では、例外的に、鹿児島県のある村から紡績工場に出稼ぎに行った女性と村に残る女性との間に手紙が交わされた。
（53）「八幡製鉄労組　佐々省三郎様」、「香月町青年会　千々和英行様」『サークル村』第一巻第一号、一九五八年九月。
（54）北方博「やどかりのもだえ――佐々省三郎の書簡に不満あり」『サークル村』第一巻第二号、一九五八年一〇月。
（55）梶塚公雄「囲炉裏ばたから――佐々・千々和書簡をめぐって」『サークル村』第一巻第三号、一九五八年一一月。
（56）佐々省三郎「ねむれ！やどかり――北方博に反論する」『サークル村』第一巻第三号、一九五八年一一月。
（57）『サークル村』第一巻第一・二号、一九五八年九・一〇月。
（58）『サークル村』第二巻第一号一九五九年一月。
（59）『サークル村』第二巻第二号一九五九年二月。
（60）『サークル村』第二巻第三号一九五九年三月。
（61）『サークル村』第二巻第五号、一九五九年五月。ただし、宮元の文章は掲載されていない。
（62）大野二郎「福岡の文化人」『サークル村』第二巻第二号、一九五九年二月。
（63）田中巌「虱の如くぬくもる熊本市」『サークル村』第二巻第二号、一九五九年二月。

(64) 沖田活美「荷圧」、山本詞「枠の下にて」『サークル村』第一巻第一号、一九五八年九月。
(65) 『サークル村』第二巻第六号、一九五九年六月。
(66) 同右。
(67) 『サークル村』第二巻第一一号、一九五九年一一月。
(68) 『サークル村』第二巻第一〇号、一九五九年一〇月。
(69) 『サークル村』第一巻第一号、一九五八年九月。
(70) 『サークル村』第二巻第三号、一九五九年三月。
(71) 『サークル村』第二巻第四号、一九五九年四月。
(72) 『サークル村』第二巻第七号、一九五九年七月。
(73) 『サークル村』第一巻第二号、一九五八年一〇月。
(74) 『サークル村』第二巻第七―九号（一九五九年七―九月）、第三巻第二―四号（一九六〇年二―四月）。
(75) 『サークル村』第一巻第四号、一九五八年一二月。
(76) 『サークル村』第二巻第三・四・六号、一九五九年三・四・六月。
(77) 『サークル村』第一巻第二号、一九五八年一〇月。
(78) 『サークル村』第二巻第一二号（一九五九年一二月）、第三巻第三号（一九六〇年三月）。
(79) 『サークル村』第三巻第一号、一九六〇年一月。
(80) 『サークル村』第二巻第八号、一九五九年八月。
(81) 『サークル村』第二巻第一二号、一九五九年一二月。
(82) 「年譜」前掲『追悼　上野英信』、五一一頁。
(83) 『闘いとエロス』、三一書房、一九七〇年、三一頁。
(84) 村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇六年一一月二三日）。
(85) 以上、村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一〇日）。

(86) 以上、小日向哲也氏からの聞き取りによる（二〇〇六年九月二六日、二〇〇八年一月二七日）。
(87) 「『サークル村』創刊宣言」『ははのくにとの幻想婚』現代思潮社、一九七〇年、一一三頁、初出は、『ドキュメント日本人　月報』、一九六八年一一月。
(88) 前掲谷川「報告風の不満」、三三二頁。
(89) 加藤重一氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一一日）。
(90) 古川実氏からの聞き取りによる（二〇〇六年三月一〇日）。
(91) 小日向哲也氏からの聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日）。
(92) 上田博氏からの聞き取りによる（二〇〇六年九月二六日）。
(93) 村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一〇日）。
(94) 森崎和江は、「雁さんはサークル村の運動をバスケットにつめて散歩に出かけるようなぐあいに、上京をくりかえした」と述べている。前掲「『サークル村』創刊宣言」、一一三頁。
(95) 村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇六年一一月二三日）。
(96) 河野靖好氏からの聞き取りによる（二〇〇六年三月一〇日）。
(97) 『サークル村』第三巻第四号、一九六〇年四月。
(98) 阪田勝氏からの聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日）。
(99) 阪田勝は、その動機を「共産党のオルグのような政治的な目的ではなく、文学の理解者をふやしたいと考えていたのではないか」と推測する。阪田勝氏からの聞き取りによる（二〇〇六年一一月二六日）。
(100) 前掲谷川「報告風の不満」、三三二頁。
(101) 『サークル村』の運動は、複雑に重層化していたサークルネットワークを結合することで実現した。現時点において筆者はそのすべてを解明するだけの情報を持っていない。本稿を補う論考として、『第Ⅲ期サークル村』（二〇〇三年夏―二〇〇七年冬までほぼ季刊にて発行、全一二号）に連載された坂口博「サークル誌発掘」（全一〇回）が挙げられる。坂口は、これらの論考を通じて、『サークル村』周辺の同時代のサークル運動の状況の一端を明らかにしている。

(102) 道場親信は、「上野英信『親と子の夜』その四　倉庫の精神史――未來社在庫僅少本で読む〈戦後〉4」『未来』四七七号、二〇〇六年六月において、「サークルを結ぶ「工作者」」としての上野英信の役割に言及している（三一頁）。

(103) 炭鉱のサークル運動については、拙稿「炭鉱におけるサークル運動の展開――文学サークルを中心に（前）（後）」『国語国文研究』第一三三・一三四号、二〇〇七年一二月、二〇〇八年三月、拙稿「炭鉱労働者と文化――一九五〇年代における文学サークル運動を軸に（上）」『層』vol.2、二〇〇八年、拙稿「一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」『北海道大学文学研究科紀要』第一二六号、二〇〇八年などを参照。

(104) 『サークル村』創刊までの上野英信の足取りをたどるため、前掲『追悼上野英信』に収録されている「年譜」と川原一之「〈小伝〉断崖に求めた文学の道――若き日の上野英信」（川原一之『闇こそ砦　上野英信の軌跡』大月書店、二〇〇八年に再録）を参照した。

(105) 上野英信「あとがき」『上野英信集1　話の坑口』径書房、一九八五年、二九六頁。

(106) 私家版での刊行後、一九五五年四月に、「ルポルタージュ・日本の証言」の一冊として柏林書房より刊行された。

(107) 前掲上野「あとがき」、二九六頁。

(108) 同、二九四頁。

(109) 田川市美術館編『炭坑と版画Ⅱ～千田梅二・炭坑のくらやみの唄』二〇〇六年、一二―一三頁。

(110) 三五頁。

(111) 「やさしい青行隊員と一しょに歌う山の子ら」『闘いのあけくれ――組織統合五周年を迎えて』赤平炭鉱労働組合、一九五八年、一三七頁、神谷国善『労働者作曲家荒木栄の歌と生涯』新日本出版社、一九八五年、四八頁など。

(112) 三木喬太「戯曲　ひとくわぼり」、同「ひとくわぼりの脚色と上演について」『山野文学』第三号、一九五七年二月。

(113) 『サークル村』の会員か否かは『サークル村』への寄稿、総会・懇談会での発言などから判断した。実際には、より多くの会員が入賞者中に含まれていることが予想される。たとえば、小品の部（入選）、創作の部（佳作）、川柳の部（佳作）で入賞している三井山野の三木喬太は「サークル村」の会員だった可能性がある。

(114) ペンネームは草笛健作である。

(115) 草笛健作「第一回筑豊文学サークル懇話会に出席して」『あしおと』第一号、一九五七年一一月。

(116) 前掲『追悼　上野英信』所収の「年譜」を参照。
(117) 第三巻第五号、一九六〇年五月。
(118) 村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇九年四月一〇日）。なお、大辻炭鉱の労働者の間に、『サークル村』の会員は含まれていなかったという。このことは、大辻炭鉱では労務管理が厳しく、レッド・パージ後共産党系の組合員がほとんど育たなかったことが深く関係しているようだ。村田久氏・小日向哲也氏からの聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日）。
(119) 前掲千々和「『百』と『やどがり』」、二七頁。
(120) 香月と村田は会社員、千々和は商工会議所勤務、阪田は九州採炭の労働組合書記だった。
(121) 阪田勝氏からの聞き取りによる（二〇〇六年一一月二六日）。
(122) 小日向哲也氏からの聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日）。
(123) 以上、村田久氏からの聞き取りによる（二〇〇九年八月七日）
(124) 以上、小日向哲也氏からの聞き取りによる（二〇〇六年九月二六日）。
(125) 小日向哲也氏からの聞き取りによる（二〇〇六年九月二六日）。
(126) 阪田勝氏からの聞き取りによる（二〇〇六年一一月二六日）。